

## 手書きひらがなの字形に関する研究

—「ささき」をどう書くか—

尾崎喜光  
家入博徳

### 1. 研究の発端

今から20年ほど前のことである。

当時筆者（尾崎）は国立国語研究所の研究員として研究をしていたのであるが、言語行動に関する日韓対照研究をしているある韓国人若手女性研究者の受け入れを一年間担当した。

研究の打ち合わせ等のためにときどき共同研究室を訪れるのであるが、研究に関する彼女の手書きのメモを見せてもらったときに驚いた。

何について驚いたかという、研究の内容ではなく、手書きのひらがなの字形についてである。どのような文であったかまでは思い出せないが、ひらがなの「さ」を「さ」と書いていたのである。

この説明では何のことかわからないであろう。本稿の「さ」の字形をよく見てほしい。左下の最後の一画がそれ以外の“本体”に繋がっており、ちょうど「ち」の鏡文字（左右反転した文字）になっていることに気づくであろう。活字であればこのような字形はごくふつうであるが、読者諸氏の中で、手書きでこのように書く人は少ないのではないだろうか。ところが彼女は「さ」をそのように書いていたため、研究内容よりもそこに注目してしまったのである。

こうした「ち」の鏡文字的字形の「さ」は、最後の一画が湾曲しながら“本体”に繋がっていることからシャープさがなくなり丸みを帯びたものとなっている。

丸みを帯びた手書きの文字（特にひらがな）と言えば、若年層の女性が使うとされる「丸文字」「マンガ字」等と称される字体との関連が想起される。山根一真（1986）はこうした「かわいい」文字を「変体少女文字」と呼び、プロジェクト・チームによる助力を得て多数集めたデータを分析した結果、「（昭和）50年普及開始」と結論づけている。今から半世紀近く前ということになる。手書きのひらがなを中心に示された実例を見ると、「さ」（や「き」）を上記のように書くことに加え、「う」や「え」の第一画を垂直に書いて第二画と交差させたり、「で」の濁点をその角度のまま第二画と交差させたりという特徴も見られる。受け入れを担当した韓国人の手書き文字には、そこまでの特徴はなかった。このことから、彼女は「丸文字」を使ったわけではないと考えられる。ではなぜこのような字形の「さ」を書いたのであろうか。

残念ながら本人に確認する機会を得ず現在にまで至っているが、考えられる可能性は「日本語学習」である。

私たち日本人は、小学校に上がってすぐにひらがなを習うが、学校で教わるのは教

科書体である。教科書体の「さ」は、第二画と第三画を離して書くため、日本人はふつうこの字形で覚える。

これに対し日本の公教育で文字を習うわけではない外国人は、必ずしも教科書体で覚えるわけではないだろう。特に独学で日本語の学習を開始した者は、教科書体ではない字形で印刷された参考書等を参照することが多いことが推測される。そのため「さ」を「ち」の鏡文字的字形で書くようになった人が現われるということは十分考えられそうである。彼女が「う」の第一画を垂直にして第二画と交差させた文字までは書かなかったのも、通常の印刷物にはそのような字形がないためであろう。

私たち日本人は「さ」に2種の字形があるという事実に気づくことはふだんあまりない。これに対し日本語を意識的に学ぶ日本語学習者は、この違いに気づきやすいかもしれない。日本語教師の日常や学習者との異文化交流を漫画で描いた『日本人の知らない日本語』（蛇蔵&海野風子著）の第2巻には、「気になる「き」」という題名の4コマ漫画が収められている。「さ」と同様に「き」にも2種の字形があるが、学習者が教師に対し「どちらが正しいですか」と質問している。話題にしているのが手書きの「き」なのか、それとも活字の「き」なのかまでは分からないが、日本人よりも意識化しやすいことが垣間見られる。

さて、「さ」や「き」の終画を上記のように書く人は、教科書体で習った日本人の中にも一定の割合いるかもしれない。特に、教科書体で習ったのち、おもにプライベートな場面で使う文字として「丸文字」を“習得”した若年層の女性には、「さ」や「き」をこのように書く人が少なくないかもしれない。

そこで、全国から無作為に選んだ多数の国民を対象に、どのような傾向が見られるかを明らかにするための調査を企画し実施した。本稿では、社会言語学（特に多人数を対象とする調査研究）を専門としこの調査を企画・実施した尾崎が調査結果について報告・分析し、手書きによる書記・書写を必須とする書道を実践・研究する家入が結果の背景等について考察する。

なお、手書き文字については、雑誌『日本語学』の2016年11月号で「手書きの字形を考える」という特集が生まれ、12人の専門家による論考が掲載されている。ただしこの特集は、同年2月に文化審議会国語分科会漢字小委員会が「常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告）」を公表したことを受けて企画されたものであることから、話題は手書きの「漢字」である。そのため、手書きのひらがなやカタカナの字体・字形については言及すら見られない。

ひらがなの「さ」の字形については笹原宏之（2002）の短い記事がある。2001年5月に浦和市・大宮市・与野市が合併して成立した「さいたま市」では、公的書類や標識等において「さいたま」の「さ」の下部を続けて書く字形を用いることに決めたことを受けての記事であるが、手書きでは両方の形が書かれていることについて言及している。本稿では、このことについて量的観点から現在の傾向を明らかにすることになる。

## 2. 調査概要

本稿で分析対象とするデータは、国立国語研究所が2009年3月に実施した全国多人数調査により得たものである<sup>(注1)</sup>。調査の企画・実施は、当時研究所員であった筆者（尾崎）が主担当者としてたずさわった。

調査の詳細については尾崎喜光（2015）で述べたが、重要な点を改めて記す。

調査の母集団は全国の20歳～79歳の男女である。調査地点は、人口比に応じた確率で無作為に選ばれた61地点である。各地点から平均約13人を回答者として無作為に抽出し、計803人から回答を得た。回答者の属性のうち、統計資料から明らかとなっている性別と年齢については、回答者の構成比が母集団のそれに近くなるよう層別して割り当てた。すなわち母集団の縮図が得られるよう回答者を割り当てた。

具体的な調査地点の選定や、回答者に対する個別面接の実施といった実査の部分は、競争入札により（社）新情報センターに委託した。

本稿で注目する特徴は「さ」と「き」に共通して見られることから、回答者にはこれらを含む人名「佐々木」をひらがなで書いてもらうことによりデータを得た。

冊子体の調査票の最終ページ（閉じた状態になる）上部には、大きく「佐々木」と印刷された箇所があり、その真下の枠内（縦31mm×横78mm）に、調査員の次の指示により、ひらがなで「ささき」と横書きで書くことを回答者に求めた。筆記が薄くて文字が判定できないことがないように、調査票を堅い物の上に乗せて強く書くことを求めた。なお、調査の目的を説明することはしていない。

Q11. では最後に、人の名前の「佐々木」をひらがなで書いてください。

横書きをお願いします。

板や台や机などの堅い物の上をお願いします。

字の大きさは、大きくても小さくても構いません。

ひらがなで、強く書いてください。

回答者に筆記してもらう枠のすぐ右下には、横に5つ連続するマスを設けた。調査員には、調査終了後にこのマスに5桁の回答者番号を記入してもらい、どの回答者の記入であるかがこのページを見るだけでわかるようにした。

調査会社には調査済みの調査票を全て納品させ、最終ページの枠内およびそのすぐ右下の回答者番号欄を筆者（尾崎）がスキャンして電子化した。これら2つの情報を一体化して電子化することで、回答者と筆記情報のリンクをより確実にした。

電子化した画像は印刷し、3つのひらがなそれぞれについて、いずれの字形であるかを筆者（尾崎）が判定し、回答者の属性を含む全体の回答データにその情報を追加した。

字形については、「さ」を例にして説明すると、左下の第三画がそれ以外の“本体”から離れている（すなわち教科書体）不連続のものと（以下では「き」の場合も含め「不連続」と呼ぶ）、第三画が“本体”に繋がって「ち」の鏡文字のようにになっているもの（以

下では「き」の場合も含め「連続（鏡文字的）」と呼ぶ）が観察されたが、この他に、第三画が“本体”から流れるように繋がっている字形も見られた（以下では「き」の場合も含め「連続（流れる的）」と呼ぶ）。

「ささき」すべてをそれぞれの字形で書かれたサンプルを示すと図1～図3のとおりである。

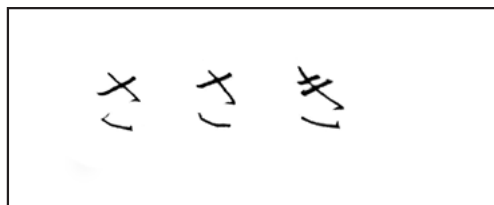


図1 不連続の字形の例（長崎県・70代・女性）

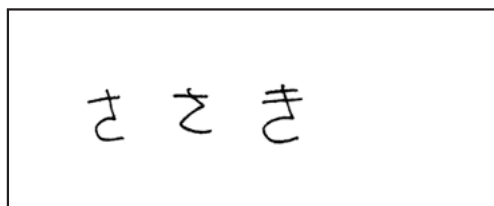


図2 連続（鏡文字的）の例（神奈川県・40代・男性）

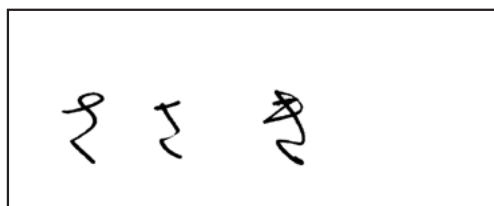


図3 連続（流れる的）の例（茨城県・60代・男性）

図3の「連続（流れる的）」の字形は、“本体”から最終画への繋がり方が、筆記を一度止めて繋げるのではなく流れるように繋げているという点で、また最終画が半円に近い弧を描いていないという点で、「連続（鏡文字的）」と明らかに異なる。

そこで字形については、当初想定していた「不連続」と「連続（鏡文字的）」にこの「連続（流れる的）」を加えた三分類とした。

いずれの字形であるかが判定しがたいケースもあることが想定されたことから、別の字形への判定が考えられるか否か、それが考えられる場合はどの字形であるかという形で判定しデータ化した。ただし、判定が微妙なケースはそれほど多くなかつ

たことから、本稿では詳細な分類による分析は行わず、上記の三分類による分析を行う。

### 3. 分析

「ささき」を一文字ずつに分け、調査結果を順に見てゆく。

#### 3.1. 「ささき」の最初の「さ」の手書きの字形

結果は図4のとおりであった。803人の回答者のうち、無記入（無回答）1人、漢字ないしはカタカナ表記による不適切な回答4人、判定不能1人を除く797人が有効回答である。なお、「九州」には沖縄県を含めた。

これによると、最も多いのは教科書体でもある「不連続」であることがわかる。グラフ最上部の「全体」によると76.4%を占める。本研究で最も注目した「連続（鏡文字的）」は数値が低くわずか2.9%にとどまる。これに対し「連続（流れる）」は20.7%と一定の割合を占めている。

「連続（鏡文字的）」の数値の低さについては、実際にこの程度であるのかもしれないが、プライベートな場面で使う字形というニュアンスを伴いすることを考えると、調査の目的を告げていなかったとはいえ、「言葉の調査を受けている」という非日常性が字形選択に影響を与え、ふだんは「連続（鏡文字的）」で「さ」を書く人もここではそれを用いず、そのため数値が本来よりも低く現われた可能性も考えられる。

回答者を男女に分けて分析したところ、顕著な違いは認められない。「連続（鏡文字的）」の「さ」は「丸文字」でもあることから女性の数値が高くなるのではないかと考えたが、数値はむしろ男性の方が若干高いほどである。

年齢層別に分析したところ、本研究で最も注目した「連続（鏡文字的）」の数値には顕著な年齢差は認められない。若年層に向け増加傾向が認められるのではないかと考えたがそのようなことはなく、むしろ60代・70代にやや多い。一方、他の2つの字形については明確な年齢差が認められる。「不連続」は若年層ほど割合が高くなるのに対し（20代・30代では9割を超える）、「連続（流れる）」は高年層ほど割合が高くなる（60代・70代では3～4割）という傾向が顕著に認められる。特に60代と50代の間の隔たりが大きい。先に指摘した「連続（鏡文字的）」が60代・70代でやや多いのは、連続した字形という点では共通性を持つ「連続（流れる）」がこれらの年齢層にやや多いことと関連があるのかもしれない。

地域別に分析したところ、顕著な地域差は認められない。ただし北海道は、「連続（流れる）」が他の地域よりも低く1割程度にとどまる一方、「不連続」は他よりも高く9割に近くにはのぼる点が注目される。

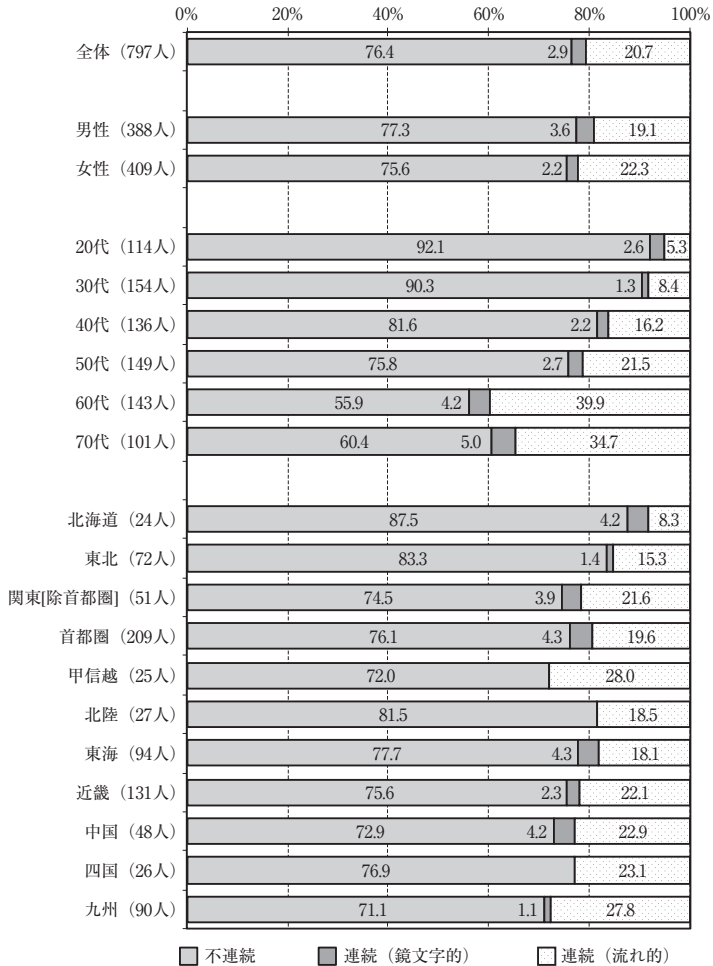


図4 「ささき」の最初の「さ」の手書きの字形

### 3.2. 「ささき」の後の「さ」の手書きの字形

結果は図5のとおりであった。無記入（無回答）や不適切な回答等を除く有効回答は793人である。

全体および属性別の分析結果は、傾向も数値も「ささき」の最初の「さ」とおおよそ同じである。ただし、年齢層別では50代で、地域別では北海道で、最初の「さ」と比べ「連続（流れる）」の数値が1割ほど高くなり、逆に「不連続」は1割ほど低くなる点が注目される。つまり、「ささき」の最初の「さ」は「不連続」で書くが、後の「さ」は「連続（流れる）」で書く人が、50代や北海道で一定程度いるというこ

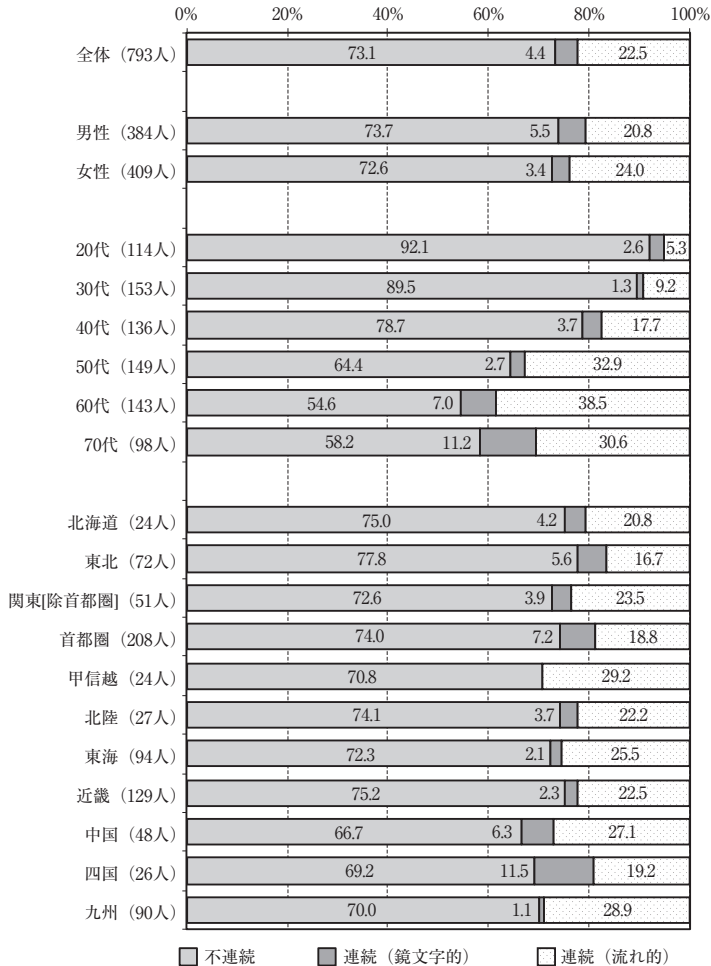


図5 「ささき」の後の「さ」の手書きの字形

とである。“正しい”字形が学校で習う「不連続」とすれば、最初の字の方がそのことが意識化されやすいことによるのかもしれない。

### 3.3. 「ささき」の「き」の手書きの字形

結果は図6のとおりであった。無記入（無回答）や不適切な回答等を除く有効回答は796人である。

全体および属性別の分析結果は、傾向も数値も「ささき」の2つの「さ」とおおよそ同じである。ただしわずかながらではあるが、2つの「さ」よりも「連続（流れる）」

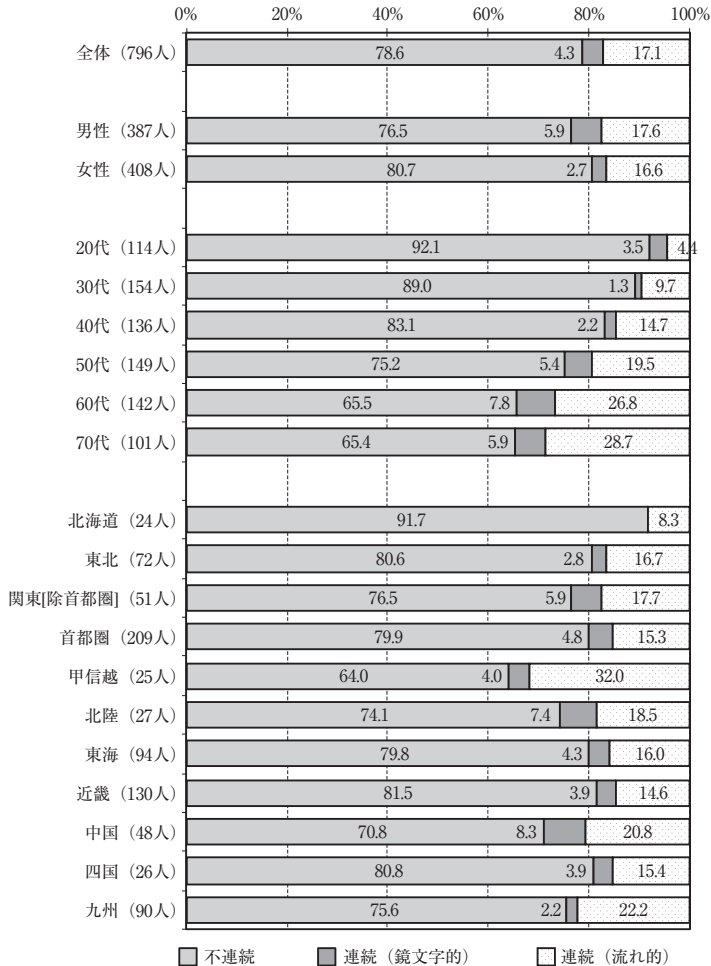


図6 「ささき」の「き」の手書きの字形

の数値が減少し、逆に「不連続」が若干増加する。「き」よりも「さ」の方が多少「連続 (流れる)」に書かれやすい。

男女差が多少見られる。本研究で最も注目した「連続 (鏡文字的)」は、絶対値としては男女ともに小さいものの、相対的には男性で数値が高く、「連続 (鏡文字的)」は筆者 (尾崎) の予想に反しどちらかというと男性に多い。

年齢層別では、先に見た2つの「さ」と比べ、50代以上で「連続 (流れる)」の数値が低くなるのが注目される。「き」よりも「さ」の方が「連続 (流れる)」に書かれやすいのは主としてこれらの年齢層においてである。



### 3.4. 字形別分析

以上に述べたことをいわば90度回転させて分析することになるが、最後に3つの字形別に、3つのひらがなを分析しよう。

結果は図7～図9のとおりであった。各図の凡例に示したように、「…」を用いて

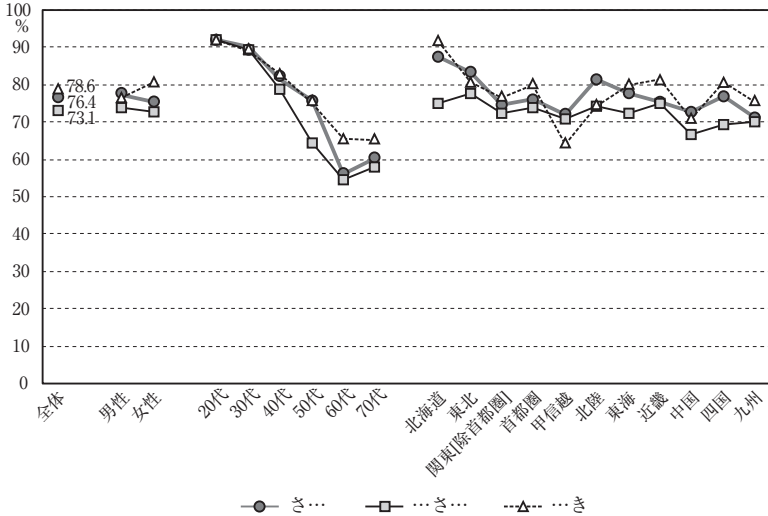


図7 「ささき」の手書きの「不連続」の字形

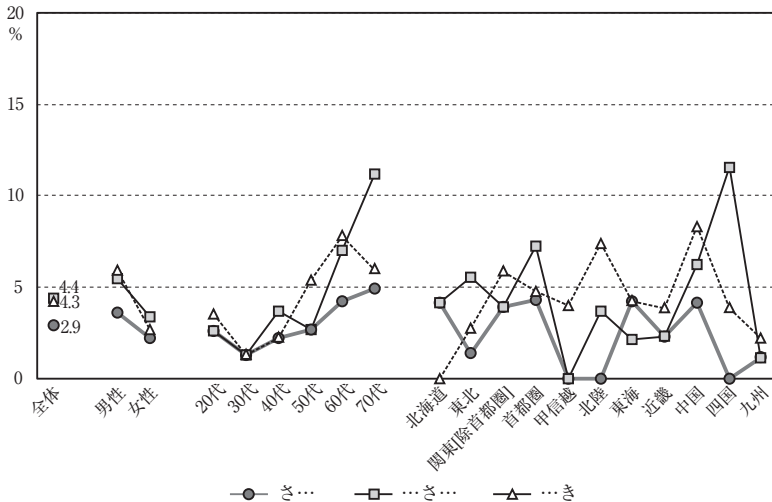


図8 「ささき」の手書きの「連続 (鏡文字的)」の字形

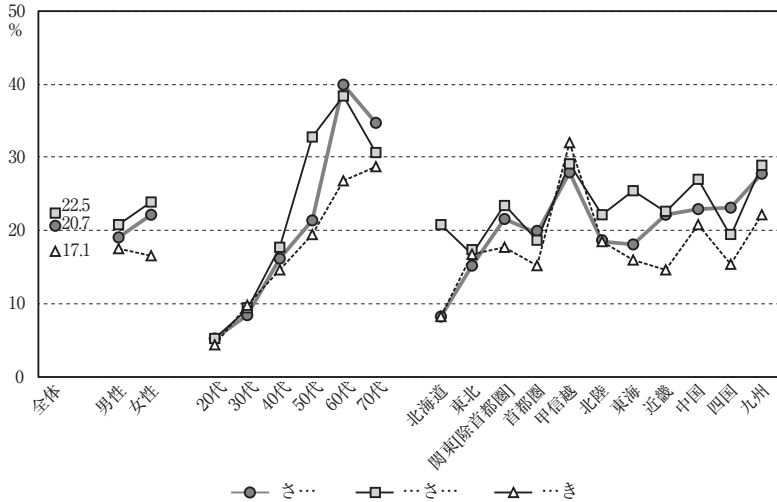


図9 「ささき」の手書きの「連続（流れる）」の字形

出現位置を示した。「さ…」は最初の「さ」、「…さ…」は後の「さ」、「…き」は「き」（語末）の意味である。

### (1) 「不連続」の字形

図7は「不連続」の字形で書いた回答者の割合を示したものである。

「さ」と「き」の違いや、同じひらがな「さ」の順番による顕著な違いは認められない。全体としては7～8割という非常に多くの回答者がこの字形を用いていることが改めて確認される。

男女差はいずれもほとんどないといってよい状況である。

一方年齢差は顕著に認められ、「不連続」の字形は、いずれも若年層になるほど増加する傾向が認められる。なお、60代・70代では、2つの「さ」と比べ「き」の数値がやや高くなる点が注目される。

地域差については顕著な違いは認められない。

### (2) 「連続（鏡文字的）」の字形

図8は本研究で最も注目した「連続（鏡文字的）」の字形で書いた回答者の割合を示したものである。数値が低いため縦軸の最大値を「20%」として示した。そのため、属性による数値の違いや3つの線の間での数値の違いが大きいように見える場合でも、実際にはそれほど大きくないことがある。

この字形を用いる人は全体としては5%以下にとどまる。それほど多くの人がこの字形を用いているわけではないことが改めて確認される。なお、小さな数値の中での違いではあるが、最初の「さ」（「さ…」）をこの字形で書く人は相対的に少ない。

男女別に見ると、数値的に大きな差とは言えないが、この字形を用いるのはどちらかと言えば男性に多い。

年齢層別に見ると、やはり数値的に大きな差とは言えないが、高年層ほどこの字形を使う傾向がいくぶん認められる。男女別にしても年齢層別にしても、筆者（尾崎）の予想と逆の傾向であった。なお、60代・70代においては、最初の「さ」よりもそれ以外の方が多少数値が高くなる傾向が認められる。

地域差については顕著な違いは認められない。

### (3)「連続（流れる）」の字形

図9は「連続（流れる）」の字形で書いた回答者の割合を示したものである。縦軸の最大値は「50%」として示した。

この字形を用いる人は全体として2割前後おり、一定の割合を占めている。小さな数値の中での違いではあるが、「き」をこの字形で書く人は、「さ」をこの字形で書く人よりも相対的に少ない。逆に言えば、「き」よりも「さ」の方がいくぶんこの字形で書かれやすい。

男女別に見ると、2つの「さ」は、男性よりも女性においてこの字形で書かれやすい傾向が多少見られる。ただし「き」にはそのような傾向は認められない。

年齢層別に見ると、高年層になるほどこの字形を使う傾向が明確に認められる。「不連続」の字形とちょうど逆の傾向である。

地域差については顕著な違いは認められない。

## 4. 考察

最後に、得られた調査結果について考察を行う。

仮名の字体は、明治33年8月21日の『小学校令施行規則』第十六条に「小学校ニ於テ教授ニ用フル仮名及其ノ字体ハ第一号表ニ、(以下略)」とあり、第一号表には平仮名と片仮名が示され、一音一字に統一されることとなった。ちなみに第一号表に記されている「さ」「き」は、それぞれ「連続（流れる）」な字形である。

本稿の考察対象である「さ」「き」について、地域による顕著な違いは見られないものの、年代によって違いが見られる。その要因の一つとして、学校教育における学習状況や使用する環境が考えられる。

「さ」「き」の文字の「不連続」な字形は、一般的に「教科書体」と言われる字形と同形である<sup>(注2)</sup>。この字形は、現在小学校の国語科書写で学習する形である。平成29年告示の『小学校学習指導要領解説 国語編』によると、小学校1、2年の書写では「点画の書き方や文字の形に注意しながら、筆順に従って丁寧に書くこと。」とあることから<sup>(注3)</sup>、点画が分かりやすい字形として採用されている形であることが考えられる。なお、平成31年検定済の小学校の教科書（国語、算数、理科、社会）の1学年と6学年（理科と社会は3学年と6学年）に目を通したところ、「さ」「き」は「不連続」な字形であった<sup>(注4)</sup>。点画を分かりやすくするために、教科に関係なく教科書はこの字形を用いているものと思われる。

したがって、これらの教科書により教育を受けて間もない20代、30代が「不連続」な書き方をする割合が高いのは、教育の影響が強く残っているためと考えられる。小学校教育6年間での学習を通して築いた書き方として「不連続」な字形で書く人の割合が高いものと思われる。

一方、「連続（鏡文字的）」な字形で書く割合が少ないながらも存在する理由として、明朝体に代表される活字文字の影響が考えられる。

先述したとおり小学校教育の6年間は「教科書体」の文字に慣れ親しむが、中学校からは明朝体等の「教科書体」とは異なった字形を教科書においても目にする事が多くなる。中学校の教科書では基本的に明朝体等の「教科書体」以外の字形となる<sup>(注5)</sup>。本稿で使用している字形も基本的にそれと同じ明朝体であり、「さ」「き」いずれも「連続（鏡文字的）」な字形である。

もともと「不連続」の字形で慣れ親しんだとしても、その後「連続（鏡文字的）」な字形を目にする機会が多くなることから、「連続（鏡文字的）」な字形で書く人も、割合としては少数ながらも存在していると考えられる。

また、「連続（流れる的）」な字形が、年代が高くなるにつれてその使用者割合が高くなる理由も、学校教育での学習が関わるものと考えられる。

「連続（流れる的）」な字形は、行書の書き方である。行書は早く書くことを目的としており、今日においても中学校から学習する。なお、平成29年告示『中学校学習指導要領解説 国語編』第2学年の書写に「漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して、読みやすく速く書くこと。」とあり、漢字の行書に調和する仮名を学習することとなっている。ここでは仮名の筆脈、つまり点画の繋がりを意識した学習をする。このため「連続（流れる的）」な字形の使用者が一定の割合いるものと考えられる。しかしながら、今日では中学校第2学年から漢字の行書に調和した仮名の学習が始まることから学習量が限られていること、また授業や教科書、さらには日常生活等で行書の字形を目にする機会はあまりないことから、20代や30代は「連続（流れる的）」な字形を使用している割合は少ないものと考えられる<sup>(注6)</sup>。

一方で、60代や70代の「連続（流れる的）」な字形の使用者率は他の年代に比べると高い。『学習指導要領国語科編 昭和二十二年度（試案）』の第三章「小学校四、五、六年の国語科学習指導」第四節「書きかた」では、指導における注意点の一つとして、「かなを二字、あるいは三字とつづけて書くことができるようにして、書くはやさをだんだんと高めていく。」とある<sup>(注7)</sup>。昭和22年頃は「かなを二字、あるいは三字とつづけて書く」と、小学校から「連続（流れる的）」な字形の学習が行われていたのではないだろうか。当時、小学校において連続して書くことを指導していたならば、自然と「流れる的」な書き方が身に付くだろう。『文部省刊行物制作便覧』（昭和27年、文部省）の「和文活字の大きさ」と書体を見ると「さ」「き」は「連続（流れる的）」である。また、『文部省著作暫定教科書（国民学校用）』（昭和59年、大空社）に掲載されている昭和21年翻刻発行された『よみかた三』を見ると、「さ」「き」は「連続（流れる的）」な字形となっている。一方で、『文部省著作国語教科書』（昭和59年、大空社）に掲載されている昭和22年に発行された小学校国語の教科書は「不連続」な字形と

なっており、当時の児童はいずれの字形も目にし、学んでいたことが考えられる。

昭和20年代当時は、60代、70代は小学生から中学生であり、この年代を教えた教員はさらに以前の書き方によって学習してきている。明治の教科書の「さ」「き」は「連続（流れる）」な字形であることから、当時の児童・生徒はこれらの字形で指導され、学習していた可能性がある。このため、他の年代よりも「連続（流れる）」な字形を使用する人の割合が高いものと考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

本研究で得られたおもな知見をまとめると次のようになる。

全国の約800人を対象に、人名「佐々木」をひらがなで書いてもらったデータを分析したところ次のことが明らかになった。

これらを「不連続」の字形で書いた回答者は7～8割おり、教科書体でもあるこの字形を用いる人が非常に多いことが確認された。明確な男女差や地域差は認められないが、年齢差は顕著に認められ、若年層になるほどこの字形を用いる割合が増加する傾向が認められた。

本研究で最も注目した「連続（鏡文字的）」の字形で書いた回答者は5%以下にとどまり、それほど多くの人がこの字形を用いているわけではないことが明らかになった。ただしこれは「調査」という場面性が本来の数値を押し下げた可能性も考えられる。明確な男女差や地域差はこの字形についても認められないが、年齢差については、高年層になるほどこの字形を用いる割合が増加する傾向がいくぶん認められた。連続した字形という点では共通性を持つ「連続（流れる）」が上の年齢層に多いことと関連があるのかもしれない。

「連続（流れる）」の字形で書いた回答者は2割前後おり、一定の割合を占めていることが明らかになった。明確な男女差や地域差はこの字形についても認められないが、年齢差については、高年層になるほどこの字形を用いる割合が増加する傾向が明確に認められた。「不連続」の字形とちょうど逆の傾向を示している。

本稿の考察対象である「さ」と「き」の字形の使用状況について、おもに年代による字形使用の違いに着目し、それが教育よるものではないかとの仮説をもとに考察を行った。

「不連続」な字形を用いる人の割合が20代、30代に多いのは、「教科書体」によって教育されてきた影響が考えられる。小学校教育6年間での学習を通して築いた書き方として「不連続」の字形で書くことが維持されているものと思われる。

「連続（鏡文字的）」な字形の使用が少ないながらも存在していることについては、中学校以降の教科書等で用いられる字形の影響が考えられる。今日においても日常生活で「教科書体」を目にすることはほとんどなく、明朝体等の「教科書体」以外の文字を見ることの方が圧倒的に多い。こうした影響によるものと考えられる。

「連続（流れる）」な字形については、昭和20年代の教育の影響が考えられる。当時の学習指導要領にもとづき「連続（流れる）」な字形を学習してきたことが考えられる。その頃の教科書には「連続（流れる）」「不連続」の両方の字形が見られること

から、当時の児童・生徒はいずれの字形も目にし、学んでいたことが考えられる。

今後の課題として、時代ごとの教科書や学習指導要領等を精査し検討することが必要である。学校教育での文字の書き方の学習の通時的な実態を明らかにすることにより、文字の書き方の傾向の要因をより明確化できる。

本研究では「面接調査において筆記させる」という方法によりデータを収集した。均一の条件下で多人数からデータを収集するためには有効な方法である。しかしその一方で、「調査」という「場」が非日常性や改まり性を生じさせることで、日常のままのデータが収集できていない恐れも払拭できない。ふだんは「連続（鏡文字的）」で書けけれども、自分の筆記を見ている調査員が目の前にいたり、自分の筆記をあとで分析する人がいることを意識し、調査では「連続（鏡文字的）」で書かなかったというケースも考えられる。

話し言葉の研究では、面接調査やアンケート調査でデータを集めることに加え、私たちの自然談話や自然会話を録音・文字化して分析するという方法も行われている。これと同様に、手書き文字の研究においても、より日常に近い実態をとらえるために、多数の「自然筆記」を収集して分析するという方法も今後開拓されてよい。

## 注

- 1 独立行政法人国立国語研究所（当時）の研究開発部門言語生活グループの研究プロジェクト「国民の言語行動・言語意識・言語能力に関する調査研究（日本語の地理的多様性に関する多角的調査研究）」（2006年度～2009年度前期）の一環として、研究課題「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」により実施したものである。
- 2 板倉雅宣（2003）によると、「教科書体」という名称については、昭和33年8月21日通達の「小学校用教科書に使用される教科書体活字の字体について」（文初教第466号）において文部省が初めてその名称を用いたとされる。
- 3 なお、平成20年告示同解説には「点画の長短や方向、接し方や交わり方などに注意して、筆順に従って文字を正しく書くこと。」とあり、その10年前の平成10年告示同解説にも「点画の長短、接し方や交わり方などに注意して、筆順に従って文字を正しく書くこと。」とあり、従来、点画を分かりやすく書く指導が行われていたと考えられる。
- 4 全頁を精査したわけではないため確実なデータではないが、国語：4社、算数：6社、理科：5社、社会3社の教科書に目を通したところ、全て「不連続」の「さ」「き」であった。
- 5 東京書籍のHPの「教科書・図書教材 よくあるご質問Q&A」には、「弊社では、中学校国語・書写の教科書用に、筆遣いや字形を書き文字に近づけた特別な明朝体を開発しました。」とあるように、字形に工夫がされているものもある。
- 6 平成20年告示同解説には「漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して、読みやすく速く書くこと。」と平成29年告示同解説と同文が記載されている。また、平成10年告示同解説には「漢字の楷書や行書とそれらに調和した仮名の書き方を理解して書くとともに、読みやすく速く書くこと。」とある。
- 7 本文は国立教育政策研究所「教育研究情報データベース」を参照した。

## 参考文献

- 板倉雅宣（2003）『教科書書体変遷史』朗文堂
- 尾崎喜光（2015）「全国多人数調査から見るガ行鼻音の現状と動態」『ノートルダム清心女子大学紀要

日本語・日本文学編』39-1

- 笹原宏之 (2002) 「<言葉のクリップボード> 平仮名「さ」の形は？」国立国語研究所編集・発行『新「ことば」シリーズ 15 日本語を外から眺める』財務省印刷局 [現・国立印刷局]
- 蛇蔵&海野風子 (2010) 『日本人の知らない日本語 2』メディアファクトリー
- 山根一真 (1986) 『変体少女文字の研究 文字の向うに少女が見える』講談社

(おざき よしみつ／本学教授)  
(いえいり ひろのり／本学講師)

---

キーワード＝「さ」の字形、「き」の字形、全国多人数調査、書写、学校教育、教科書